

心動くままに

何故言友会はあるのか？－エゴと共同性

S

3年来、東京言友会の会員だった。その中で、言友会と自らの方向性の違いをとらえつつ、吃解研を発足させようとしつつも、言友会へのつながりを求め続け、言友会との関係を曖昧にしておこうと思った。そういうところで、批判が外在的批判となってしまうところで、言友会批判をタブーと課してきた。

このタブーを、今取り外そうと思う。

先日、ある障害者の講演を聞いた。内容的にも感銘を受けたのだが、その障害者が「私」、「私達」と語る時、その人が他の障害者とつながっている、そしてその障害者の受けてきた悲しみ苦しみを感じ、その運動に重みを感じたのである。

さて私はかつて、ある吃音者が「吃音者が・・・」と語っている時、「あなたが『吃音者が、・・・』と語る時、自分がその中にいない」と批判したことがある。

それとは逆に、吃音者の話を聞いていると、自分の話しかしていないとすることが多々ある。又、吃音者の話には、私達一吃音者という概念が希薄である。

ある吃音者と話している時に、「あなたは、吃音者から・・・と、相談を受けた時に、どうアドバイスしますか」と聞かれたことがある。

私は、アドバイスというのがどうも分からない。一つは、アドバイスというのは自分にはもうその問題はない、というところで即ち共通の問題はない、というところで成立するような気がする。はたしてそうなのか、という疑問が湧く。

もう一つは、アドバイスをする人が総てという訳ではないが、どうも優越感をもった自己顕示欲という観点でアドバイスをしている場面に多々でくわせる。ここでなら、スティグマがスティグマでなくなる、劣等感を感じなくてもよい、ということが昂じて、優越感さえいदैてしまうという人にでくわせる。単に「個人の性格」を問題にしているのではない。場がそのようにも規定されるということであり、何故吃音者の集まりが他の障害者の集まりのような共同性を持ちえないのか、ということである。

更にもう一つ、アドバイスというのは、問題を個人の問題として考えることから起きるのではないだろうか、確かに当事者意識の問題として、個人の問題として収束してしまう、という側面は起きると思う。しかし、そもそも吃音一吃音者問題とは何か？と問い掛けていった時、関係性の問題としての吃音者問題がとらえられると思う。その関係の問題を内自有化して、ぶったぎってとらえるところから、錯認としての「個人の問題」が出てくるのではないか。

そもそも吃音者がその抱える問題を個人の問題としてとらえたとき何故集まりを作り、維持する必要があるのだろうか。

昔、言友会の会員が、三遊亭歌奴という自らが吃音者であることを売り物にして売り出

した落語家に会いに行った話が、その機関紙―「言旗」に載ったことがある。そこで歌奴は何故君達は集まりを作っているのか、と鋭い指摘をし、インタビュー達が答えられず、落ち込んで帰ってきた記事が載っていた。

今の言友会の方向性から考えると、何故集まっているのか、分らない。そればかりか、言友会を離れることがカッコ良いことになる。残るのは、世話好き、他者の世話をするのが生きがいだという人になる。

確かに、吃音者の問題を個人の問題としてとらえ、結局は個人で解決すべきだという視点に立つと、歌奴が言うように、そして誰かが言ったように、「群れているのは、気色の悪い」ことになる。

では言友会はどのようなこととしてあったのか、あるのだろうか。

そもそも言友会のとりわけ、吃音者宣言を打ち出して以降、それもセルフ・ヘルプの理念などという集まり自体を解体する方針を打ち出したのに、何故言友会はありつづけるのだろうか？

それは別に方向性の問題ではなく、方向性が正しかろうが、間違っていようが、単に吃音者が集まっているという問題なのではないだろうか。

私流の表現を用いれば、要するに「無自覚的な被差別の共同性」ということなのだが……。

だがマージナルな吃音者にとってその共同性とはなんなのだろうか？私は吃音者をマージナルマン（境界人）という規定をしてきたが、別にマージナルマンという実体的人がいるわけではない。吃音者は障害者である。「どもりは悪いもの、劣ったもの」という意識が、その社会に凡通的にあるところで、吃音者は何等かの差別を受けている。障害者とは「身体」の「機能」を巡って差別を受けるものであるという規定において、吃音者は障害者である。しかるに、吃音者のうける差別は相対的排除の性格が強いところで、心理的マージナリティに陥る。マージナルマンとは自分が所属する準拠集団を隠そうーパスしようとする人である。

吃音者は、自らを障害者として認めようとしないところで、マージナルマンになる。

障害者運動においては、自らが障害者であることを認め、宣言することから運動が始まる。

さすれば、言友会には集まりとしての運動はない。「ただ、吃音者が集まっているというだけの集まり」である。総体としては、言わばただのサロン。しかも個々の連帯感の希薄なサロン。

しかもそれだけではない。昔、臨時教育審議会（臨教審）答申に「期待される人間像」というのがあった。その同じロジックで「期待される吃音者像」を掲げ、その運動を進める。そのロジックのワナに誰も気付かないのだろうか？

全言連の「吃音者宣言」が出されて十年余、それを最終到達点と規定しつつも、それは障害者宣言ではなく、「どもりは悪いもの、劣ったもの」という凡通的意識に対峙しえず、結局揺らぎから抜け出せず、かえって逆戻りしていると感じているのは、私だけであろう

か？

最近、私は言友会のことを語らなくなった。別に吃音者であることを隠そうとか、問題が解決したということではない。言友会の説明ができなくなった、訳の分からぬ集まりだとしか言いようがない。言友会会員であることを恥ずかしいと思うようになっているのである。

言友会には、結局エゴしかない。

言友会が言友会という立場性の曖昧な名前で、サロンのなもしくはバラバラな個々の営為として止どまる限り私（達）との交わりはないだろう。

そういう観点で、私はもう自分が言友会の会員であるということを突き出すのは止めようと思う。

将来的に交わる可能性を捨てはしないけれど・・・。